

信州読書会 ツイキャス読書会

課題図書 谷崎潤一郎 『春琴抄』

信州読書会では、毎週、ツイキャスをつかった視聴者参加型の読書会を開催しています。

信州読書会のメルマガ登録者は、課題図書の読書感想文を 800 字で書いていただければ、放送中に紹介します。

(募集要項はメルマガでお伝えします)

また作品に関する質問・感想などは、どなた様も、放送中ツイートいただければ、とりあげます

信州読書会 ツイキャス <http://twitcasting.tv/skypebookclub>

『信州読書会』メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714

今後のツイキャス読書会の予定です。 http://bookclub.tokyo/?page_id=2343

『ツイキャス読書会』音声のバックナンバーです。

<https://www.youtube.com/playlist?list=PLVj9jYKvinCsgP7jtFgzqxea6cgqd7mrf>

(各回の感想文は動画の下の説明欄に PDF へのリンクを張ってあります。)



第 147 回のツイキャス読書会の課題図書は、谷崎潤一郎の『春琴抄』です。

読書感想文を提出して下さった皆さんありがとうございます。

[寺田農さんの朗読](#)

[青空文庫『春琴抄』](#)

「春琴抄」感想文

現代小説に慣れてしまったので、谷崎さんの本はなかなか読む機会がなかったのですが、宮澤さんの「本当に面白かったです」という言葉が、脂がのった旬の秋刀のように聞こえ、YouTube で寺田さん朗読の『春琴抄』を聞きました。本当に面白かったです。食わず嫌いが、いかに損であるのかを実感しました。

春琴は子どものころ読んだ竹取物語と重なりました。作品の背景に、終始鶯の鳴き声と琴の旋律が流れていたせいかもしれません。かぐや姫も春琴と同じ月夜の下に生まれました。赤々と燃える太陽のような月の下で生を授かり、美しく重い運命を背負い、限りなく優しい人に出会います。

時代が移り変わっても、誰かがまた同じ月夜の下に生まれ、優しい人たちに出会う、あるいは佐助が残した欠片を拾うのかもしれませんが。中原中也の詩の一節のようにです。

月夜の晩に、ボタンが一つ
波打際(なみうちぎわ)に、落ちていた。

それを拾って、役立てようと
僕は思ったわけでもないが
なぜだかそれを捨てるに忍びず
僕はそれを、袂(たもと)に入れた

『月夜の浜辺』 中原中也

(おわり)

「春琴抄」感想文

今回、寺田農さんの朗読を聞いての読書会参加です。

寺田さんの名調子が谷崎先生の(三島由紀夫が、多分言っていた”完璧なる”)文章と相俟って、堪能、充足してまい、感想文を書く気が、だいぶ萎えてしまいました。おかげで、主宰のクオリティーやや抑え気味の朗読は読書会のテキストとしては、むしろ、そうあるべきで、さすがの配慮であることがわかりました。

(それはともかく、朗読は非常に消耗する作業だと思います。この場を借りて感謝致します。)

昔、私が本でこれを読んだ昭和の頃はフロイトの精神分析がやたらもてはやされていて、女性が、うっかりバナナなど食べていると、『それは抑圧された性衝動の表れだ。なぜ、あなたは皮をむいたのだ?』とか言われかねない時代でしたので、この作家はリビドー発達段階のどこかの過程で”こじらせて”いるな、なんて思ったものです。

”こじらせる”という言葉はまだ流行っていませんでしたけど。

いずれにしても、作品の分析など私にはできませんが、春琴抄はまごう事なき名作だと思います。言葉が細胞の隅々まで染み込んで来るようで、私の歪(いびつ)な精神が、一時的にでも、矯正されるような気がします。不思議です。

もちろん、健全な少年少女が読むと、心が歪(ゆがむ)のは言うまでもありません。昭和 47 年には新藤兼人が『讃歌』というタイトルで映画化していることを申し添え、ここで一句。

谷崎も

春川ますみ

好きだった

最後に、谷崎がいわゆる悪魔主義の系譜に連なる作家とされることがありますけど、この人の写真に長い耳をつけて、鍵のシッポを書き加えると、悪魔そのものだな、と思うのは私だけでしょうか。

(おわり)

『春琴抄』感想文

句読点もあまりなく、蔓延(まんえん)体であるせいか読みづらかったが、とても味わい深い文章だった。春琴と佐助の恋物語以外にも、当時の暮らしの模様や趣味なども書いてあって、いろいろ楽しめた。

しかし、本当のところ、佐助のことは好きになれなかった。いつも弱腰になっていて、春琴を愛しているより、彼女の美貌にだけ見込んでるように見えたからだ。春琴が火傷をして間もなく盲目になったのも、醜くなった春琴を見てしまえば彼女に仕えることができなかつたからではないだろうか。本当に彼女を愛しているのだったら、彼女の変わり果てた姿も受け入れることができたと思われる。結局佐助は春琴という人物にほれ込んだのではなく、自分の助けなしでは何もできない驕慢な女性に支配され、支配するという歪んだ恋人ごっこをし続けている気がした。

本を読みながら一番に気にかかったことは、なぜ彼らは結婚せず、子供も育てなかつたのかという疑問だった。いくら身分の差があつて、春琴が自尊心の高い女性であるにせよ、まったくその気がなかつたとは思えない。これは恐らく、佐助の望みではないかと思われる。春琴が母親になり、自分のことを夫として認めてしまえば、彼女の世話役を子供にとられてしまうだろうし、もう支配され支配するという関係性から抜け出すことになってしまうからである。

佐助は春琴の一生と死後までプロデュースして、記録を残すことによって、自分が夢見ていた全く違うある「永遠の女性」を本の中に剥製させ、伝えるという恐るべきことをやったのではないかと思った。

(おわり)

炭山韓国読書会のブログです。 <https://ameblo.jp/shimogashiwa/>
ツイキャスチャンネルはこちら <https://twitcasting.tv/c:nindaranna>

『佐助の献身』

もしも春琴や佐助のように視覚から得る情報なしにどうやって生きていくのだろうか？

目の見えない世界で生きていこうと思うと、足りない情報を想像で補うしかない。そのことに割くエネルギーは膨大だ。福祉の現場では、アイマスクを装着し、見えない世界を体験するプログラムがあるが、普段使わない神経をフル稼働させるせいか、終わった後ヘトヘトになる。

この小説は、目の見えない春琴とその付き人である佐助の世界をまるで抽象画を読み解くように表現していると感じた。

私が最も気を取られたのは、春琴から撥で殴られたり、感情の起伏にまかせて口を利かなかったり、様々な精神的苦痛を受けながらも、なぜ佐助は耐えられたのか？ ということだ。

私はこう行きついた。佐助にとって、何をされてもただただ首を垂れて従うしかない、それほどまでに春琴は美しかったのだろう。厳しくわがままな反面、自分の身の回りの世話なしには生きていけない春琴のギャップに佐助はますますいとおしくなるばかりだった。

もう一つ、春琴が盲目により自分の知らぬ第六感の世界を持ち得ているということへの佐助の複雑な思いもあったのではないか。知らぬ世界を生きている春琴は佐助にとっていつまでも自分の手の届かない人だった。そのもどかしさが佐助の感情をますます鼓舞したのかも知れない。

佐助のように、男性が女性に献身する小説は珍しい。

全体が、とてもエネルギーに満ちていて、圧倒されてしまった。

(おわり)

belouga さんのブログです。過去のコラムなども掲載されています。ぜひご覧ください。

『belouga のつれづれ』 <http://ameblo.jp/clearmandarin/>

盲人の 意地の悪さで 書いてます

私は普通高校を卒業後、盲学校(現在は視覚特別支援学校)に進学し、3年間寄宿舎生活を送りました。

そこには生まれつき見えない人、途中で失明した人、見えないけど明るい暗いはわかる人、私のように見えるけど色々な「見えなさ」を持つ人がいました。

見えない人は皆音感が優れているとか、心の目で見ている、なんて世間のイメージに当てはまる人はごく一部。イエスは盲人は盲人の道案内はできないと言っていたようですが、全盲カップルが手を繋ぎデートに出かけ、ラブホテルでチョメチョメし合う、なんてのもありふれた光景でした。

盲学校や寄宿舎の行事にボランティアできた近隣の大学生と視覚障害者が恋愛関係に発展し、結婚に至ったケースもあります。

押入れの中の暗闇で三味線を爪弾く事で春琴と同じ気持ちになれた気がした佐助。私は彼が春琴に混ざり合っていくように見えました。

そして想像だけでは物足りず美しい姿のままの春琴を瞼の裏へそのまま残す為に自らの目を針で刺し、更に佐助は春琴と混ざり合ってしまったと私は感じます。佐助は一体どこへ行ってしまったのでしょうか。

佐助と春琴の話は極端にしても現実の夫婦関係、友人関係、会社と従業員など、共依存関係はこの世にたくさんあると思います。

最後にご存知ない方はいないと思いますが、障害者=ピュアで努力家なんてのは、メディアが作ったものであります。少なくとも私にはそれは当てはまりません。

以上、盲人特有の意地の悪さで書きました。あなかしこ。

(おわり)

「春琴抄」 感想文

初めて読みました。内容を全く知らずに読んで良かったと思いました。

なんと美しい文章でしょう。流れるようで無駄がない、すごい作家だと夢中になりました。なぜ早く読めるのか、読点が少ないのに気づきました。優しく静かなのにわかりやすい、一気に引き込まれました。

最初の二基のお墓のシーン、師弟であり、ただならぬ関係が短い文章の中に、ああ、こう言う事なのかとすぐに先の話が察せられ、お墓が、そこに立つ二人の様で「夕日があかあかと照っているその丘にたたずんで・・・」と、春琴の墓と少し小さい墓の映像が目には浮かぶようで、いきなり作家の才能を感じました。

この小説は、(自分ほどの人間は)と思う春琴のと(自分のような人間などは)と謙る佐助が宿命のように出会って積み上げて行った苦難の道、最終的には音の追求だったのではなかったかと感じました。

佐助のように春琴の「端麗にて高雅」な容姿と気位の高さと才能に「崇拜の念」を持ち、それらを愛し維持させる為に奔走しますが、引いては春琴が自分だけの手の内にとどまることを予感しての計算もあったのではと思われませんが、最後は春琴の方が折れてきたのに最期まで師弟の関係を崩さない姿勢には一貫した美しさと信念を感じました

ただ春琴に信仰に近い思いを持って、子供を宿すのはどう言う思いだったのかと少し複雑です。ただ肉欲にかられたのか、若すぎて考えが及ばなかったのか。里子に出しても何も感じてない春琴も、若さ故か。酷いです。

月謝を納められない弟子を破門にしたり、付け届けが多い弟子には愛想よく接したり、弟子の女兒を傷つけたり、浪費家で、そのしわ寄せが佐助に働いて稼ぐ事を強いる、佐助は着る物すらみじめな貧しい労苦、「彼女は知らず知らずのうちに禍の種を八方に蒔いていた。」「天は痛烈な試練を降して生死の巖島に彷徨せしめ増上慢を打ち砕いた」「彼女の容姿を襲った災禍はいろいろの意味で良薬となり恋愛においても芸術においてもかつて夢想だもしなかった三昧境のあることを教えてであろう」ここにこの二人の生き様が集約されていると思いました。

佐助の究極の愛情は春琴と同じ立場に立って考えていることだと思いました。

幼い頃から暗闇で稽古した経験がそうさせたのか。

そして、火傷を佐助にだけは見せたくないと言う気持ちに添って佐助は眼を突く、しかしその瞬間「今までで一番楽しかった」と幸せを感じる、残酷ではあるが浄瑠璃芝居の極め付けのようで、魂震えました。

春琴最期の頃、暇を持て余し絃を弄んでいる、その傍に佐助が恍惚として頸を垂れ一心に耳を傾けている、その音色は弟子たちが三味線に仕掛けがしてあるかと疑うほどであったと、全てがここに到達するために二人は耐え忍んできたのだと思いました。驚さえ反応する音にまで磨き上げた奇跡であると。

二人が雲雀の籠を開けて放った場面も印象的で、「盲人の師弟手を取り合って空を仰ぎ遥かに遠く雲雀の声が落ちて来るのを聞いていた」てる女の言葉ですが、私は春琴のこの世からの旅立ち、多くの苦楽からの自由になる象徴的な瞬間であると感じてとても胸に残りました。

学生の頃よく耳にしたこれが耽美派と云われる所以かと、美しい場面を何度も振り返り読み直しました。良い作品でした。

(おわり)

『春琴抄』の読書感想文

人は自分の思うように世界を作り上げるといふ。言い訳ばかり、武勇伝ばかり。無論、私(らふ)もその 1 人だ。できないことや苦しいことを周りのせいにする。その一方で、くだらない些細なことではか自尊心を満たすことができない。良くも悪くも自分の都合のいいように世界を作り上げる。

佐助も自分の思うように世界を作り上げたかったのではないか。春琴伝を華美に作り上げ、周りの者に春琴の美貌や肉体美、芸術性や尊厳をいい伝える。ここまでくると、春琴の存在自体が虚構だらけの空虚な存在に思えてきた。幽霊みたいだ。

第三者として春琴と佐助を読者に紹介する私も、晩年の佐助の記憶の中に存在した春琴の姿もぼんやりしたもので、空想で補っていくうちに本来の姿とは異なった一人の別な貴い女人を作り上げたかもしれないと漏らしている。

佐助は晩年には芸術で認められて検校という格も授かった。実力もある佐助が、春琴という存在に固執している様子は、作中の私が「あたかも暮石には佐助の霊があって今日もなお春琴に仕える幸福を楽しんでいるようである」と感想を漏らしていることからしても、異様である。佐助の作りあげた異様な世界。佐助も幽霊みたいに思えた。盲目的に春琴に従事して愛したその様子は、文字通り自ら盲目の世界に入った事柄を含めても、美しいというよりも自虐が過ぎるので恐ろしかった。2 人の間に生まれた子たちに全く関心を寄せない様子には人としての生や温もりを感じられなかった。逆に、死や冷たさを連想させた。繰り返すが、佐助も春琴も幽霊のようだ。

佐助が春琴と共に作り上げたかった世界は一見完成されていて美しい。少なくとも、佐助自身はそう思っているのだろう。いや、美しいと言い聞かせているように思える。佐助や春琴には心苦しいが、読後に虚しさが募った。なぜなら、自らを飾らずに生きるって私にとっては極めて難しい課題であったからだ。だから、このような解釈の読書感想文になったのかもしれない。時を経て、再読したいと思った。晩年にも再読したい。その時々には、自分の中で佐助や春琴は成仏しているだろうか。

(おわり)

「春琴抄」感想文

「鴉屋春琴伝」を読みたいなど、完全に騙されるぐらいお話に引き込まれました。

実際に、ググってみました……。

春琴は目が見えないという事で、ある意味特殊だというふうにされている所もあるし、特別な感じがしますが、私は究極の女性の取扱説明書なんじゃないかなと思いました。

西野カナさんの楽曲に「トリセツ」というのがありますが、そんな感じがしました。

急に不機嫌になったり、少し意地悪をしたりして反応を見るとか、少しでも他の女の人に目がいくと嫉妬するなんてよくある事だなと思いました。

谷崎潤一郎先生は、男は佐助になれば丸くおさまると考えておられたのか、それとも女性の扱いのお手本なんだと思われていたら少し嫌だなと思いました。

佐助にとっての春琴は、師匠という立場もあるから一般の男女の関係とは少し違うところもあると思うけど、佐助みたいな人がいたらいいなと思わせる存在だと思いました。

でも、あんなにかゆい所まで手の届く佐助が相手だと、こっちの内面はすべてお見通しなんじゃないかなと思うと少し怖い気がしました。

宮澤さんも解説で、途中から力関係が逆転してくると話されていて、私もそうだなと思いました。

春琴は本当のお嬢様でお姫様かもしれないけれど、そうでない一般人の私にも、お姫様扱いされたい気持ちがあるから、佐助っていいなと思いますが、一般人のひがみなのか、佐助が怖いとも思いました。

でしょ？ そうでしょう？ と、男の人に思われてもなんだか嫌なので、よく分からない。

女心はよく分からないと、女の私がそう思い色々考えさせられました。

(おわり)

「春琴抄」感想文

「自分は、人生の中で子供を設けることはおそらくあるまい」

十代の頃、漠然とした決定を下した。女性と付き合う時には早めに伝えていたし、それで相手を傷つけたこともあっただろう。それでもその決定は確信に近いものがあった。

年を経るごとに「子供」という明確な存在のみならず、そもそも結婚という生活様式に対しても思うところが出てきた。

村上春樹氏の著作『ねじまき鳥クロニクル』を読了した頃、その漠然とした思いが恐怖心に近いものであったことに思い至る。人を愛し共に生活をするということは幸せな営みである一方、愛する者に襲いかかる脅威に対し躊躇せず金属バットを振るう可能性も併せて引き受けることである、という事実に行き当たった。つまり、人を愛し続けることの血生臭さに怯んでしまったのである。

「これは子供どころじゃないぞ、結婚をすることも一筋縄ではいかないのかもしれない」

そんな頃『春琴抄』を読んだ。

そこに描かれる言い伝えは言葉を必要とせず、「夫婦にあるべき普通」も必要としなかった。

どんなときもただ寄り添い、心を推し量るだけである。数人の子を設けはしたものの自ら育てることはなく、里子に出している事からもわかる通り、二人の関係はあくまでも夫婦であり師弟であったということのだろう。

春琴が病床に伏せる直前、共に中庭に出て彼女の愛でた雲雀を大空に放つも、いつまでも戻ってこなかったという象徴的なエピソードに一抹の寂しさを感じるが、その寂しさでさえ共有できる二人だけの世界に行けたのならばそれはとても幸福なことなのかもしれない。

また、他作品にも見られるように SM 的な解釈で見られがちな作品ではあるが、氏の描くフェティシズム的側面から見れば個人的には擬似近親相姦的な背徳が感じられた。

と、今回もまた自分語り過ぎてしまいましたがメルマガ読者諸賢は首肯せらるるや否や

(おわり)

『 比翼の鳥 連理の枝 』

どこかで、サディズムのほうが大変なんだよ…… と聞いたことがある。

我慢を強いられて大変なように見えるマゾヒズムは、受け身であるがゆえに楽であるらしい。サディズムは、相手が何を望んでいるか、どこまでの被虐を求めているのか、相手の心をより読まなくていけないらしいのだ。

私は、この話を思い出して、春琴と佐助をほんの少し…… 理解できたような気がした。

最初は、使用人が主家の令嬢を一方向的に慕っているような春琴と佐助。

だがその実、最初に惚れたのは春琴だと思うのだ。自他共に認める才色兼備だった春琴は、思いがけず盲目になり、彼女の内面はズタズタだったはずだ。旧家に生まれた矜持も手伝い、他人に心を開けなくなったのも想像に難くない。そんな中、佐助を手挽きに指名するが、理由を「誰よりもおとなしゅうていらんことを云えへんよって」(P20)と露悪的に答える女心が垣間見える。

自分がどんなに辛く接して折檻しても、泣きながら傍にいる佐助。佐助が自分にどう振るまっしてほしいかを見抜き、一見わがままでどうしようもないお嬢様を演じていたのではないかと思う。佐助にとって、代々春琴の家を主家とする使用人の立場から、そのような春琴に仕えるのが一番自然だったはずだ。他の使用人では務まらないわがままをきくことで、春琴の自分への愛を感じる佐助。対して、春琴のほうは、いつ自分のわがままや折檻で佐助の心が離れるともわからない。他の使用人のように暇乞いをしてもおかしくない綱渡りの状態で、佐助に辛くあたっていたように思う。それが佐助の望みだったから。

だからこそ、佐助が自ら盲目になったときに、春琴は心からホッとしたのだと思う。これで、佐助を無理に折檻しなくても、きっと自分から離れないだろうと。

これは、春琴と佐助の特別な愛のカたちではなく、矮小化されて、私たちの恋愛と同じなのだと思う。オー・ヘンリーの『賢者の贈り物』のように、お互いが完璧なフィフティー・フィフティーの関係はありえない。男女の恋愛は、どこかいびつでアンバランスなのだ。それでも、男女がバランスをとろうとしてまで一緒にいることが、傍目からはうかがい知ることのできない睦み事もしくはプレイなのだと思う。きっと、それが春琴にとっては折檻で、佐助にとっては目を潰すことだった。

春琴が亡くなって、21年も孤独の中に生きた佐助。でも、実際には佐助は孤独ではなく、永遠に離れることのない春琴の息吹を感じていたのだろう。もしかすると「死」でさへ、二人にとってはプレイだったのかもしれない。

武者小路実篤の『愛と死』の主人公・村岡が婚約者・夏子の死から21年後でも思いを馳せている。どうしても離れられない境地に達した男女には「生」や「死」は意味を持たないのだろう。

私は、この小説はサディズム・マゾヒズムではなく、どうしても離れがたい男女のありふれた物語のように思う。作者自身は、何度も結婚・離婚を繰り返しているが、春琴・佐助は死んでも尚、そばにいる。ひよっとしたら、作者の二人への憧憬があるかもしれない。

お互いを見つめるだけで、なした子にも未練がない人生。春琴の墓に持坐して控えている佐助の墓は、使用人としての最後の矜持だ。二人の恋は実ったのだろう。

「天にあっては比翼の鳥となり、地にあっては連理の枝とならん」(白居易・長恨歌より)

(おわり)

岡山読書会のブログです。過去のコラムなども掲載されています。ぜひご覧ください。<http://ameblo.jp/kaoru8913/>
スカイプで個別読書を主催されています。ご興味ある方はブログからお問い合わせください。
ツイキャスのチャンネルはこちら <https://twitcasting.tv/yuuki27144>

『春琴とともに飛べる領域』

(引用はじめ)

佐助はなぜ正式に彼女と結婚しなかったのか春琴の自尊心が今もそれを拒んだのであろうか。てる女が佐助自身の口から聞いた話に春琴の方は大分気が折れて来たのであったが佐助はそう云う春琴を見るのが悲しかった、哀れな女気の毒な女としての春琴を考えることが出来なかったと云う畢竟めしいの佐助は現実に眼を閉じ永劫不変の観念境へ飛躍したのである

(引用おわり)

要するに、春琴が M なのではないか？ 春琴の驕慢な態度が、世間のサディズムを刺激しているとすれば、彼女は M である。普通は、性病である風眼をうつされたり、鉄瓶の熱湯を顔にかけられたりしないわけだ。彼女が世間の S っ気を、誘っている。芸事の三味線の師匠としては、弟子たちにどこまでも S であった春琴も、世間に対しては、どこまでも無力で M であった。独り立ちできない、か弱い盲人の女性である。

佐助の甲斐甲斐しい献身も、結局は裏目に出て、世間から恨みを買ひ、ことあるごとに、二人は世間に無力をさらして責め立てられている。利太郎の横恋慕からくる嫌がらせも、貧しい弟子の付け届けの白仙羹のエピソードも、つまるところ、佐助のへまであり、しくじりである。春琴が最終的に当たるのは、佐助の至らなさに対してである。しくじっては、叱られる。そういう意味で、目を突いたのも、佐助の付き人としての責任のとり方だ。

ただ、ふたりが夫婦の関係になれば、佐助が死ぬまで、目なぞ突かずに、男として春琴を守らなければならない。そうすれば、世間はもうこの二人をいじめないだろう。佐助がすべての世間の矢面に立ち、漱石の『門』の宗助と御米のように、共依存のなかで世間に埋もれるばかりだ。

異常な師弟関係が続けることで、二人は世間と緊張関係を保つことができる。春琴は世間に対して M、佐助は春琴に対して M でいられることで、抑圧の移譲している。その抑圧の反作用こそが、芸事の一門の精神的紐帯を固くする。

佐助は、芸に貪欲であり、芸の完成のために春琴をご本尊に祭り、崇拜したともいえる。お手洗いでもお風呂でも、彼女が一切を佐助に任せたというのは、甘やかしながらも彼女の無力感をどこまでも育てることである。芸の師匠としての春琴は S だが、それ以外は、どこまでも無力な女性に春琴の存在に陥れたのは佐助の戦略である気がする。同時に、芸事の中で、春琴を守ったのだ。

春琴が、師匠としても無力な存在になられては、佐助には具合が悪い。自分も目を突き、世間的に無力な介護者になる下がることによって、春琴を盾にして芸を完成させ、検校にまで上り詰めたとすれば、佐助には佐助の無意識の計算あったように思う。

芸事において自由を確立するというのは、夫婦の共依存も世間の政治的圧力も届かない領域を確保することだ。『眼を閉じ永劫不変の観念境へ飛躍』するというのは人間に許された最後の尊厳の在り処ではないか。

1933年、ナチスが政権をとった年の作品だ。抑圧の深まる世間に抗して、谷崎は観念の世界に逃げたのではない。観念を想像する世界にこそ、政治権力の及ばない人間の領域の最後の砦がある。春琴の雲雀は雲間に消えたが、佐助の頭の中には、まだ春琴とともに飛べる領域が残っていた。

(おわり)

『信州読書会』メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714
今後のツイキャス読書会の予定です。 http://bookclub.tokyo/?page_id=2343